



# 万国外科学会（ISS/SIC） 日本支部ニュース

News of Japanese Chapter of International Society of Surgery

発行：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部  
〒213-8507 神奈川県川崎市高津区溝口3-8-3  
帝京大学医学部附属溝口病院外科  
TEL: 044-844-3333(内線3223) FAX: 044-844-3222  
発行者：山川 達郎  
編集責任：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部広報担当委員・  
村田宣夫(帝京大学溝口病院外科)  
E-mail: nmurata@med.teikyo-u.ac.jp  
印刷：株式会社 dig TEL: 03-3551-3060  
年2回発行 1995年4月創刊

## International Surgical Week, ISS/SIC, 2003とタイの友人たち

万国外科学会日本支部長  
(ISS/SIC, National Delegate, Japan)

**山川 達郎**

帝京大学医学部名誉教授・京浜総合病院院長



2003年8月24日から28日にかけてバンコックで開催される予定であった恒例の第40回 International Surgical Weekは急遽中止の決断が下されました。理由は、突然持ち上がったSARSの問題で、米国やオーストラリア、日本のように東南アジアへの旅行を差し控えるよう通告する国もあって、欧米、日本からの参加が激減する可能性があったことに加え、イラク戦争の勃発とそれに派生して、Al-Kaidaテロ組織によるBali島で起きたような爆破事件の危険性も報道されたことがあります。ISS/SICの本部の調査では、50%以上の招請講演者、理事らが不参加を表明したことですから到底、成功はおぼつかなかったことであろうと推測されます。しかし、ISS/SIC本部およびタイの運営組織委員会としても相当額の募金を集め一方で、これまでその準備に資金を使っていましたので、たとえ、損害保険に加入しているとは言え、条件通りにその処理が簡単に解決されるとは考えられませんからISS/SIC本部としても、今回の中止決定は苦渋の決断であったに違いありません。

しかしながら、生涯あるかないかわからないISS/SICの自国開催招致に成功して、これまで国をあげてその成功に向けて準備して、プログラムも

完成するところまでこぎつけていたタイの運営組織委員会としては、本当にあきらめきれないショッキングな出来事であったに違いありません。また、期待に胸をふくらませていたある友人を思う時、また同じアジアのISS/SICの1メンバー国としても、今回の久しぶりにアジアで開催される今回の流会を残念に思うと同時にタイの友人に心からの同情の念を禁じ得ません。

今後は、今まで奇数年に開催してきた本会を偶数年に切り替えて、2004年に2005年の開催予定のDurbanでの会を繰りあげ開催するかといった考えもでたようですが、偶数年に定期的に開催されているCICDとの兼合いや、準備期間の問題、資金繰りなど解決しなければならない難問があるようです。最終的には10月18日から開催されるシカゴでのAmerican College of Surgeons時に決定されることをおもいますが、多分、2005年のDurban(Africa-Europe)は予定通りに開催されることになることと思います。

最近のニュースからうかがえる今後のISW Congress開催地としては、2007年のMontreal(North-Central South America)、2009年にAdelaide(Asia-Pacific Basin)は決定的であると思われます。そうなりますとISW 2011 Congressは、順番からすればEurope-Africaということになりますが、今回のISW 2003 Bangkok Congressが流れたこと、および日本が永年、招致運動を展開してきた経緯から、たとえ相当強い対抗馬がでてきたとしても、日本が選ばれる可能性が強くなるのではと推定されます。比企能樹ISS/SIC理事の理事会での討議結果を伺って、今後の方針を立てていく必要があろうかと考えています。いずれにしても、今回残念ながらこのような結果に終わってしまったタイの友人の無念さを晴らすためにも、できるだけ早いアジアへの招致に成功することができるよう日本支部としては活動していくべきであろうと思います。会員皆様のご理解とご協力をお願い致します。

## 万国外科学会理事の 任期を終える

ISS/SIC理事  
**比企 能樹**  
北里大学名誉教授



私の理事としての任期は1999年8月より凡そ2期、4年余になったが、この間常に波乱万丈であった。学会創設以来100年目という記念の総会を2001年に発端の地ベルギーのブリュッセルで無事に平和に祝うことができた。だがその後、次々と起こる緊迫の世界情勢の中で、わがISS/SICもご多分に漏れずその波に翻弄されることとなった。

100年記念のISW'01ブリュッセルの直後9.11のNYテロに続き昨年アフガニスタンの争乱が勃発し、そして今年初頭からイラクがきな臭くなり、イスイスの学会本部はテロを警戒して理事会の会場をフランクフルトの空港に設え3月21日に予定した。だが理事会前日に行われたブッシュによるイラク攻撃は、フランクフルトへ向う遠距離からの26%の理事の足を止めた。何時起るか分らないテロの危険が随所にある。先のニュースレターでも報告したが私も外務省と相談の結果、日本に待機する結果となった。

連日TV画面からは、歴史ある国を容赦なく爆撃する映像が繰り返された。だが伏兵がとんだ所に忍んでいて、伝統あるわが学会総会がこれによって潰されようとはその時期誰も想像だにしなかった。それは新型肺炎SARSである。5月に入ってからSARSはアジアを拠点としてますます猛威を振るった。テロも怖いがSARSは、感染の経路も原因もまして治療法も確立しない化け物で、多くの人、特に欧米の人々はおびえた。

その結果、8月のアジアで行われるISW'03は、果たして開催可能であろうか？という疑問が広がり始めた。その頃イス本部では、集まってきた世界中からの演題をまとめ、プログラムの作成を始めていたが、その中身は例年になく充実したもので特別講演やシンポジウムも質の高い内容と評価を出した。

ところが、4月後半に入るとSARSの勢いは加速拡大し、イラクの戦況も英米が思ったよりも厳しく、不安は世界中に広がった。そして参加予定していた欧米の外科医たちがISW'03のバンコクはキャンセルと次々に申し出始め、もはや開催のための最低出席率が得られるかという危機が訪れた。本部は急遽各国のシンポジストとメインセッションの演者に向って個々に「あなたは8月バンコクに行きますか」と打診が始まり、そのキャンセルの数が余りにも多く、遂に6月6日に開催中止と本部から公式に理事及び各國代表に通知があった。この間、本部は開催に費やした莫大な経費を如何に補うか、保険が果たしてどの位までカバーしてくれるか、日夜を分かたず休日返上で折衝を続けた。メイルばかりでなく電話が直接各国理事にスイスから発信され、理事個々の意見をまとめた。ようやく保険会社からの補填も決まり、よい結論を導いた本部職員の手腕は大したものと感心した。しかし個人として愚痴を言わせてもらうならば、この数ヶ月の通信費の個人負担は大きく痛かった。

その後SARSが沈静化し、一応イラク戦争も終結ということになったが2003年のISWを果たして水に流していくのであろうか？準備万端整えてきたバンコクの仲間の努力を放置してもいいのか？という声が理事達から上がり始めた。本部では緊急に2004年の2月にバンコクで再びISWを催してはという問い合わせのアンケートを、各理事に回した。私は出月前会長と日本側の山川日本支部長、北島事務局長に相談の結果、賛成票を投じた。その大きな理由は、折角バンコクのISW'03に採用された演題や、高品質と本

(2面へ続く)

(1面から続く)

部が評価した特別講演やメインセッションも2年後にそのままの内容が、日進月歩の科学の世界で通用しないということで、規模を小さくしても遅くとも半年遅れで発表されるべきであろうという話し合いになった。しかしアンケートは、結果的に賛成3、反対9、不明2で、今回のISWは完全に断念、2005年のISW'05ダーバン開催まで引き伸ばされることを7月23日に公式に本部は発表した。

10月18日、19日には米国のシカゴで催される私の理事として最後の理事会に出席し、今後の人手やISW'05ダーバンの開催について討議する。本来ならば、理事の交代は8月のバンコクで行われるはずであったが、以上の経緯で10月の理事会まで先延ばしされた。5大陸持ち回りの原則を鑑みると、今年アジアでの開催が流れた以上同じアジアの日本で開催の可能性が出てきたのではないだろうか。私の任期中には遂に夢の実現は見られなかったが、この後につなげて頂きたい。シカゴで北島政樹教授が2005年—2007年の学会会長と2007年のISWの総会会長を委譲されることに期待できると同時に、本学会が将来の発展に向って日本に期待するところ大なるものがあることを実感する。

任期を終えるに当たり会員の皆様方にご協力を深く感謝すると共に、今後の日本支部の益々の発展を祈念して止まない。同時に、一に学術集会が何ものにも妨げられることなく催されるような世界平和の訪れをひたすらに待つのである。ありがとうございました。

### ISS/SIC 年会費納入のお願い

以下の如き申し合わせができています。近く、請求が届きますので、できるだけ早い納入をお願い致します。

1) ISS/SIC will again charge an amount of USD 120.00 for ISS/SIC Membership including the subscription to World of Journal of Surgery in 2004.

2) The integrated Societies of the ISS/SIC have charged the following amount for their membership in 2003.

Integrated Society	2004 Assessment
IAES	USD 20.00
IATSIC	USD 20.00
IASMEN	USD 20.00
BSI	USD 20.00

3) Chapter / Country	Chapter Assessment 2004
Australia	USD 20.00
USA	USD 25.00 (USD 15.00 + USD 10.00 to ISS/SIC Foundation)
France	EUR 36.00 (~USD 30.30)
Japan	USD 40.00 (USD 1,000.00 to ISS/SIC Foundation)



抗悪性腫瘍剤  
薬業・指定医薬品、要指示医薬品<sup>(1)</sup>  
**フルマリン**<sup>®</sup> ドキシリジン製剤  
注)<sup>(2)</sup>注意—医師等の処方せん・指示により使用すること  
100 カプセル 200  
※効能・効果、用法・用量、警告、禁忌  
を含む使用上の注意等は製品添付文書をご参照ください。  
製造販売元 中外製薬株式会社 | 〒104-8301 東京都中央区京橋2-1-9  
ロシュグループ | 2003年10月作成

### 第15回 万国外科学会 日本支部会議事録

日 時: 2003年6月5日木曜日 午前7時30分から8時30分  
会 場: ロイトン札幌 2階 クリスタルルーム B

出席者: 30名

秋丸琥甫、出月康夫、井上喬之、大谷吉秀、沖永功太、上西紀夫、北野正剛、桜井洋一、嶋田 紘、鈴木眞一、砂川正勝、高見 博、田尻 孝、田中雅夫、谷川允彦、中尾昭公、名川弘一、野口志郎、橋爪 誠、林 四郎、比企能樹、平山廉三、前田耕太郎、真船健一、丸田守人、宮島伸宜、村田宣夫、山岡義生、山川達郎、若井俊文

(五十音順、敬称略)

### 議 事

- 1 日本支部会会長(山川先生)挨拶
- 2 ISS/SIC理事会報告(比企先生): タイの学会についておそらく1年延ばす、あるいは止めることになるだろう。学会のキャンセルの場合、ロイド保険に入れており、主催者側の負担は軽減される。
- 3 2005年のダーバンは実施される見通しである。ダーバンについて詳しい大分医大の北野教授からダーバンが安全な地域である旨の発言があった。
- 4 Senior member(15年以上の会員歴)の資格を持つ先生は是非自己申告を行って欲しい旨の報告があった。

会員数 270名

内訳	アクティブメンバー	250名
	シニアメンバー	19名
	名誉メンバー	1名
	新入会	3名

### 5 庶務報告

- 6 決算、予算案について: 2002年決算報告がなされ、承認された。2003年の予算案が承認された。
- 7 日本支部ニュース16号発行されたことが報告された。
- 8 出月先生から万国外科学会本部へ学会を実施するか、しないかの決定を早く出すように要請してほしいという発言があった。

### 会員動向(2003.10)

会員数 269名

シニア手続: 久次 武晴先生、森 昌造先生  
退会者: 石田 清先生、進藤 勝久先生、山下 精彦先生、  
中山 若樹先生、横山 利光先生

(五十音順)

### 支部活動報告

- 2003.6 日本支部ニュース第16号発行  
2003.6.5 第14回万国外科学会(ISS/SIC)日本支部総会(ロイトン札幌)  
2003.11 日本支部ニュース第17号発行



オキサセフェム系抗生物質製剤  
指定医薬品、要指示医薬品<sup>(1)</sup>  
**フルマリン**<sup>®</sup>  
静注用0.5g・1g、キット静注用1g  
注射用フロモキセフナトリウム Flumarin® 略号 FMOX  
注1) 注意—医師等の処方せん・指示により使用すること  
■ 薬価基準収載 ■ 「効能・効果」、「用法・用量」、「禁忌」、「原則禁忌」、「使用上の注意」等については添付文書をご参照下さい。  
〔資料請求先〕 塩野義製薬株式会社  
〒541-0045 大阪市中央区道修町3-1-8  
○ シオノギ製薬

## 特別寄稿

## 国際学会、あれこれ

草野 満夫

昭和大学 一般・消化器外科教授



小生が昭和大学に赴任する前は、旭川医科大学の第二外科に勤務していました。当時の水戸教授はヨーロッパ研究外科学会(European Society for Surgical Research, ESSR)の日本代表であった関係で、医局に事務局があり、小生が事務局長のような役を仰せつかった。毎年開催される学会の案内を日本外科学会雑誌に掲載してもらう、抄録用紙、案内を希望者に発送する、抄録を一括学会本部に送ることなどが主な仕事であった。また、学会ツアーを安くあげるために、旅行代理店の添乗員の代わりをすることも仕事のひとつでもあった。日本から、毎年30題近く応募があるが、その演題リストを作成したりしていると、ついつい外国に行きたくなり、毎年のようにこの学会に参加していた。そのお陰でいろいろな事を経験、勉強させていただいた。

いろいろな人の出会い、知り合いになれたことは小生の国際学会を通じて得た財産となっている。留学先を決めたのもこの会で、パリで開催された総会でルンド大学のベングマルク教授にお会いし、勉学の機会を得られた。外国人との出会いもあるが、日本人とも親しくなる。日本の学会では他の病院の先生方と親しくなる機会は少ないが、懇親会などではどうしても日本人同士が集まり、また、お互いの発表を聞きに行くなど、短い期間であるが、日本の先生方と懇意になれる機会が多い。当時、助手であったが、日本では直接お会いできないような高名な教授ともお話を機

会も少なくなかった。東京医科歯科大学の岩井教授とはヘルシンキの学会だったと思うが、お会いして以来、今まで懇意にしていただいている。

こんなこともあった。pseudo添乗員は旅行が順調にいっている時はいいのだが、一度トラブルがあると辛くなる。記憶が定かではないが、確かストックホルムからヘルシンキの飛行機が大幅に遅延になり、その案内、調整が大変であった。幸い英語の堪能な岩井教授の助けで、急場を乗り越えることができた。

こんな失敗もあった。発表の時、スライドの順序が完全にずれていたことがあった。“next slide please”を繰り返したが、なかなか目的とするスライドが現れない。私はいつも縦5枚、横4枚のスライドフォルダーに左上から下に向かって入れることにしていた。スライド係りが左上から右の方向に入れたのが原因であった。スライドの番号も付けてなく、試写もしなかった。この事に気づき、これはどうにもならないと“Please give me a couple of minutes.”と言って、壇上からスライド映写室に行き、順序を直し、発表を続けた。後で、他の大学の先生から、“堂々とした発表でしたね”、と変な誉められ方をされた。質問の英語が聞きとれず、恥をかくこともあるが、国内学会でもそうであるが、国際学会での発表後の何ともいえない充実感は格別である。

これまで、アイルランドのダブリン、デンマークのオーフス、ギリシャのコルフ島など学会でなければ行けないようなところも訪れる事ができた。コルフ島での学会は小生がスウェーデンのルンド大学留学時代の仲間が会長で、20年ぶりの再会ができた。

これからの方には国際学会に参加し、いろいろなことを経験して欲しい。当科では毎年、新教室員に対して小生が理事長をしているPPSA-JC（汎太平洋外科系学会日本支部会）の国際学会に出席、発表することを義務づけている。旅費はこの1回だけ教室もちである。

万国外科学会は少し縁遠いものであったが、遅ればせながらこれからの学会に教室員と一緒に参加したいと思っている。

## 特別寄稿

私の人生の転機になった  
第33回万国外科学会

加納 宣康

亀田メディカルセンター  
特命院長補佐、主任外科部長、  
内視鏡下手術センター長、  
マハトマ・ガンジー・メモリアル医科大学名誉客員教授

万国外科学会（World Congress of Surgery）の中でも、私のその後の人生に大きく影響することになったのは1989年のトロントでの第33回の会議でしょう。

そのとき私は「Radical Mastectomy with Blood loss less than 50 ml」というビデオを発表いたしました。あの頃はまだopen surgeryの時代であり、私は脾頭十二指腸切除術、肝切除、直腸癌手術、乳房切除術などのビデオを供覧して、いわゆる腕自慢をすることに生きがいを感じていました。

そんな時代に第33回の本学会で、あるフランス人が腹腔鏡下胆囊摘出術のビデオを供覧していました。その時私が抱いた感想は、「こんな面倒くさいことをよくやる気になるのだ。俺なんかとてもやる気がしないな」というもので、冷ややかに見ていました。

ところがその後、この腹腔鏡下胆囊摘出術はすでに欧米では急速に普及しつつあることがわかり、日本にも上陸し、山川達郎先生が1990年5月には本邦第一例目に成功したと報告されました。私は、これは大変なことになったと思いました。あのとき冷ややかに見ていたあの術式が、こんなにも広がりを見せていると言うことは、これから外科医は「これができる」と外科医として役立たずになってしまふ」と感じました。

そう感ずるやいなや、私は当時勤務していた岐阜市郊外にある松波総合病院でもこの手術を実施できるようにしなければならないと感じ、すぐに準備を始めました。しかし当時は器機の入手が困難で、腹腔鏡下手術を施行できるまでの体制作りは大変でした。準備期間中に、自分で考案したブラックボックスに膀胱鏡を挿入してhands-on trainingをチーム全員で行い、1991年2月には岐阜県第一例を成功させることができました。

その間に、1991年1月にタイのバンコクで開催された第1回アジア肝胆胰外科学会に出席中、帝京大学の山川達郎先生と親しくお話しする機会に恵まれて、それが後に私が帝京大学医学部附属溝口病院外科へ移る話に発展していったのです。

その後1991年5月には帝京大学医学部附属溝口病院外科へ移り、その後山川達郎先生のもとで腹腔鏡下手術に関する発表を多数することに繋がっていました。

今振り返ると、私の人生の転機には二つの国際学会が大きく影響していたことがしみじみと実感されます。不思議な縁というものです。

多価・酵素阻害剤  
**ミラクリット®注射液**  
MIRACLID Inj. 25,000/50,000/100,000単位  
一般名：ウリナスタチン

生物由来製品、指定医薬品、非表示医薬品<sup>(注)</sup>  
(注)注意—医師等の処方せん、指導により使用すること

※【警告】、【禁忌】、【効能・効果】、【用法・用量】、【使用上の注意】などの詳細は添付文書をご参照ください。  
＜資料請求先＞  
持田製薬株式会社  
東京都新宿区四谷1丁目7番地  
電話(03)3358-7211(代) 〒160-8515

プロトンポンプ・インヒビター  
**タケプロン®** カプセル15・30 OD錠15・30  
(ランソプラゾールカプセル&口腔内崩壊錠)  
■機能・効果、用法・用量、禁忌・使用上の注意等について、添付文書をご参照ください。  
**Takepron®** ■薬価基準：収載  
△武田薬品工業株式会社  
〒540-8645 大阪市中央区道修町四丁目1番1号  
http://www.takeda.co.jp/  
(0304:BS4)

## 特別寄稿

バンコックでの万国外科学会が延期になって  
—Third International Symposium on GIST—  
グリベックは如何にしてGISTに使用されるに至ったか

**西田 俊朗**

大阪大学大学院医学系研究科  
臓器制御外科講師



寄稿をするに当たって「ISW 2003 in Bangkok is CANCELLED!!!」となり、困り果てた末に、万国外科とは直接関係ないが、一部の外科医の間で最近話題になっているGISTに、どの様な経緯でグリベック（イマチニブ）が使用されるに至ったかを国際学会開催の意義を考えながら書かせて頂く事にしました。

GISTはGastrointestinal Stromal Tumorの略で、ジストと発音されています。多い腫瘍ではありませんが、最近学会等で小さいながらよく取り上げられる理由は、疾患概念がはっきりしてきたことと、その診断マーカーのKITタンパク質を分子標的としたグリベックの臨床使用が可能となったことが挙げられます。

この薬のGISTへの使用のきっかけは1998年に逝ります。1998年春、フィンランドのヘルシンキには、妻Mrs. Luiseの2年越し、繰り返し再発する胃GISTに対する頻回の外科治療に強い絶望感と憂いを抱いた夫—Mr. Henrik Kuningasがありました。Kuningas氏は、妻の病気を何とか治したい一心で、私財を投下、Kuningas財団を創り、Peter Roberts博士に相談し、世界中のGIST、Leiomyosarcoma（多くのGISTは従来こう診断されていたため）、KITの専門家をヘルシンキに招待し、正しく手作りでFirst International Symposium on GISTを開催しました。実は、世界中の80名以上の研究者に声を掛けたのですが、実際に参加してくれたのは40人にも満たなかった様です。発表者は14人だけで、日本からは、丁度その年GISTにKITタンパク質が特異的に発現しKIT遺伝子変異がGIST原因であることを報告した我々のグループを代表して北村幸彦教授、そして国立がんセンター中央病院の片井均先生が発表されています。Kuningas氏は、そのシンポジウムをずっと拝聴し、その時点ではGISTとKITは繋がったものの、グリベックとは繋ぐことは出来なかった、と言います。只、欧米のシンポジウムの例に漏れず、発表者は発表内容を原稿にしてAnn Chir GynaecolにGISTの特集として発表（1998 vol.87 No.4）しました。

その後もKuningas氏は世界中に進行GISTの治療法を求め歩きました。アメリカのボストン、ハーバード大学ダナハーバー研究所のDemetori博士に会い、Druker博士等が慢性骨髄性白血病（CML）で分子標的治療薬として臨床使用し始めているNovartis社のSTI571（Imatinib Mesylate）がCMLの原因タンパク—BCR-ABLタンパク質だけでなくKITタンパク質を効率よく抑え、治療薬の可能性があることを聞き一躍喜びました。その後の経過をKuningas氏は少し言葉を濁しながら、ありとあらゆる手段を使って妻にグリベックを使用できる様運動した、と言います。フィンランドの財界重鎮であるKuningas氏はNovartis社のCEOに直接交渉、その結果、臨床試験等一切をすっ飛ばして、Novartis社のCEO Dr. D. Vasellaのトップダウンで例外的にMrs. Luiseへグリベックが使用されることになりました。治療は1999年4月からヘルシンキ大学中央病院で開始されました。この治療成績は非常に良好で、この「Case 0」症例は2001年4月のNew Engl J Med. に、この雑誌としては例外的なCase Reportで報告され、欧米での第二相臨床研究（B2222）開始と保険適応への強い牽引力になりました。その前後の経緯に関しては、Harper Business社出版のDr. D. Vasellaの著書「Magic Cancer Bullet」を参照して頂きたい。

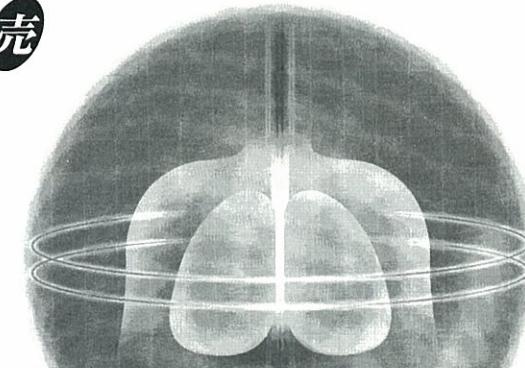
一方で、グリベックの治療効果が非常に高かったこともありKuningas氏が主催した2001年9月のSecond International Symposium on GISTには120～130人の参加申し込みがあり、二日間に16人の発表があり、シンポジウムは成功裏に終わった。この成果はEur. J. Cancerの特集号として発表されています（2002 Vol.38 Suppl.5）。こうした地道な活動の末、LancetやNew Engl J Med. 等一流医学雑誌に論文が出るようになりGISTの分子標的治療が一躍注目を浴びるに至りました。本邦でも、本年行われた学会では、小さな会場ながらGISTのセッションへの参加者は少なくありません。今年、

Third International Symposium on GISTを開催するに当たって、Kuningas財団はNovartis社の後援を得て240人の医療関係者をヘルシンキに集めましたが、参加希望者はその数倍にも及んだとのことです。この会では非常に和やかな雰囲気の中、最新の分子生物学的知見や臨床研究結果が報告されました。分子標的治療薬グリベックの固形癌への導入と云うイノベーションが、新たに抗がん剤耐性機構の研究解明を誘導し、別の分子標的治療薬（SU011248、RAD001等）の開発と前臨床試験導入を促すと云う新たなイノベーションを生み出しました。

医療に於ける臨床研究も基礎研究も今や國の枠を越えて進行しつつあります。国際学会やシンポジウムに参加すると必ず感じるのは、各国の臨床家や研究者の臨床と研究への熱意とProductivityの高さです。更に加えれば、国際親睦や共同研究の話し合いが出来ることも良い所です。万国外科学会もその例に漏れない学会で、今後益々進むであろう国際的な医療・学術研究活動の中心を担う学会だと思います。グリベックのGISTへの導入は、一民間人の妻への愛情がその引き金になりました。今年はSARS騒ぎで万国外科学会は開催されませんでしたが、次回の万国外科学会が外科学の新たなイノベーションを生み出すことを期待し、その日を楽しみにしています。



## 新発売



### 好中球エラスター阻害剤

指定医薬品  
要指定医薬品  
**注射用エラスボール®100**

シベレstattナトリウム水和物  
注) 注意—医師等の処方せん・指示により使用すること。  
ELASPOL®  
薬価基準収載

●効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等、  
詳細は製品添付文書をご参照ください。

製造発売元  
資料請求先  
**ONO 小野薬品工業株式会社**  
〒541-8526 大阪市中央区道修町2丁目1番5号  
030601

## 編集 後記

◆タイ・バンコックでの万国外科学会学術集会が中止になった。今回の学会には例年になく質の高い演題が集まっていたと聞いていたので、学会参加者・関係者はたいへん残念であったに違いない。小生もそのうちの一人である。少々遅らせてでも開催してほしかった。元来気の早い方で、学会の事前登録をして、ホテルの予約までして準備していた。あと少し中止の知らせが遅れたら、往復の飛行機を予約するところであった。幸い、学会から予約金はすべて戻ってきた。予約金はあきらめようかと思っていたが、本部からメールですぐに手続きについての連絡があり、正直ほっとした。皆様はいかがだったでしょうか。◆学会がこれからもまたキャンセルになるような事態が起こらないことを祈っているが、今回の事件で学会本部が予約者へ行った対応は迅速で誠意を感じた。対応の指揮をとったのがスイスの本部なのか、タイの学会事務局なのか、あるいはその他の有力者なのか小生は知らない。しかしいずれにしろ中止決定後は学会本部や関係者が協力して事後処理に当たったものと思われる。むずかしい国際学会運営の中で特別な問題が起ころうに上手に対処したと思う。学会本部に対する評価が高まったのではないだろうか。（村田宣夫）